

東京日々新聞

九百七十八号



長崎小月村の京泊りと云ふ所の長谷川源三と云ふ
 者の女房をせよ去年十月ころより阿部の晴明と
 云ふ狐が乗り移つたて色々妙なる事と云ふ
 散居本年上月五六の雨を降る火の風が
 吹きて世界々々黒土ふ成る事と云ふ
 云ひ觸れけむ近村の
 人まで聞き傳へて
 何れを止火と云れ
 る様ふと祈禱して京泊よ
 稲向の社
 と建たして
 小豆の飯や
 油揚げを備へて
 鼠の油煎ひの洗
 米のりと置き立てける國中の大
 評判と云ふ参詣する者も切らず
 交點と作て貰へ何の様多病氣を治ると云ひ或ハ
 手の相を見て貰へ運の吉凶を別ると持て林とて殿の如く集りける風を或る人
 より此稻荷よま官位を多から京都位と受けお行か掛いと云ふ相談が始りて
 商人仲間は何程の金と調へ本年一月中旬ふか多ハ亭主熊吉と隣りの金六が
 女房かま手と連せ船より出て出帆せしが備後の尾道まで上陸して或る酒博まで路用と啓
 る飲んで仕舞ひ上京する事由出来ず詮方が無成りて遂に帰事成りしが三人俱道々
 南無妙法蓮華經と唱へて人の門に立つ梢を藝妓の廣島まで帰り來り暫らく

運路して早主の熊吉と國元侯と路用の正面と云て歸國しおろそか稻荷よまの御
 殿も此の御様は廣島に居る時同國の瀬川百太郎と稱若と同伴して船の中で乳果み大帆
 隠成り國へ帰つて早主と熊吉と侯と身と清潔と松罰が當りて別家と借りて居て
 毎晩百九と云ふ御殿と無じと此の御様を御保り人身の吉山福福いらくと
 御殿へ成りて隨分くと無じと此の御様を御保り人身の吉山福福いらくと
 未の御殿を百九と御殿と中そと御殿と
 申さく果は返ります

萬一齋
 以方幾

野良足屋 渡辺彫染

